

平家物語灌頂巻の研究

阪口拓也

〔抄録〕

平家物語には灌頂巻という建礼門院を中心とした別巻が存在する。主に琵琶法師の語りの秘曲として、用いられていたとされる巻であるが、これが読み本にも存在するなど、多様な姿をしているのである。各諸本の灌頂巻は物語の展開や、文章の違いなどの多くの問題が見受けられる。本論文は語り本、読み本の灌頂巻、

ひいてはそれに該当する部分の本文、章の展開などを比較し、語り本、読み本の灌頂巻の成立を明らかにすることを目的としたものである。

キーワード 平家物語、灌頂巻、語り本、読み本

一章 灌頂巻概要

一節 灌頂巻の内容

灌頂巻とは、一般に一方系統の平家物語の終わりに付した別巻のことである。今まで、武士たちを中心に描かれていた「平家物語」であったが、この巻では建礼門院が話の中心となるのである。この巻は五章より成り、建礼門院の御出家の事、大原への入御の事、大原御幸の事、六道輪廻御物語、女院死去の五章である。章の名称は各諸本によって異なっている。源平盛衰記では灌頂巻という名は与えられていな

いが、四十八巻がそれに相当する。八坂系統の諸本では、灌頂巻に該当する本文は、巻十一、十二に収められている。延慶本は、八坂系統と同じように収められている。

二節 灌頂巻の成立論

灌頂巻で大きく問題となるのが、その成立についてであろう。これには主に二つの説が存在する。一つは、灌頂巻は本来、結尾の一巻として書かれており、当初から分立していたという説である。これは後藤丹治氏が『戦記物語の研究』で説かれている。後藤丹治氏は『戦記

物語の研究』で、「平家物語の灌頂巻は初めから文学的動機により建礼門院の御経歴を特に別巻として作出したものであろう。」と述べている。^①

もう一つは、この巻の各章は本来は年月の順序でそれぞれ前巻中に収められていたが、建礼門院の御出家に関する章が琵琶の秘曲として重要視された経緯から、特に切り離され、補足され、独立する一巻となったという説である。これは山田孝雄氏が提唱している。山田孝雄氏は『平家物語考』で、

思ふに平家物語としての創作は音楽としての平曲の創成と前後して成れるものなるべしといへども、まづ文章成りて而して後に音楽之に付随すべきことは、曲譜先づ存して之に歌詞を加ふるものにあらざるかぎり、通常いづれの歌曲にても行はるべき自然の順序なりといはざるべからず。(中略)

思ふに、灌頂巻が授職灌頂又は伝法灌頂の意義なる以て考ふる時は、これを特に一巻として普通の巻より除きたるは、必ず平曲伝授といふことの起こりし後のことなるを証明するものにして、その伝授ありてはじめて灌頂の巻に意義と用を知るをうべし。

と述べている。^② いずれの論も決定的な証拠に欠けており、今だに、灌頂の意味は定まっていない。

第二章 諸本概要

一節 語り本系統

本論で使用する諸本の概要をここで示す。平家物語の諸本は大きく二つの系統に分かれる。その一つが語り本、他方は読み本もしくは増補系と呼ばれている。平家物語は琵琶法師によつて語られた文芸である。その琵琶法師が語りの台本として用いたと考えられる諸本が語り本である。語り本は、琵琶法師の語りとは切っても切り離せない関係にある諸本なのである。しかし、平家物語は琵琶法師の語りを「聞く」という享受方法から、「読む」という享受方法にまで広がりをみせてくる。その際に、成立した諸本が読み本である。読み本は、「読む」という行為を目的にして成立しているため、語り本より情報量が多いなどの特徴がある。これより、各諸本の概要を示していく。尚、各諸本の概要は、渥美かをる氏の「平家物語の基礎的研究」に依る。^③ 百二十句本斯道文庫蔵本のみ、翻刻の別冊に依っている。^④

竹柏園本「平家」は天理大学蔵の片仮名交じり本である。本文を分割し、一行を費やして章段名を付している。

百二十句本は二種あり、一種が京都府立図書館、国立国会図書館上野支部、天理図書館蔵であり、平仮名交じり本である。表題が欠けており、内題に「平家」とある。各巻十句に区切り、計百二十句あるところから、この名称で呼ばれている。京都府立図書館本は本文を改行することで句の切り目を示し、上野図書館本は一行を費やして「第一句」などと示している。灌頂巻は特立していない。

もう一種の百二十句本は本斯道文庫蔵である。現存する百二十句本諸本の中で一番古い書写であるとされている。前記百二十句本とは著しく異なる古態を有する伝本である。前記百二十句本は平仮名交じり文であったが、屋代本に類似した漢字片仮名交じり文である。組織は同じであるが、本文記事の増減、詞章の異同を多く含み、百二十句本の成立過程や屋代本、平松家本、鎌倉本などの隣接諸本との関係を考える上での新しい資料である。

鎌倉本「平家物語」は彰考館蔵であり、片仮名交じり本である。表紙に「八坂本」と書き抹消し、「鎌倉本」と記している。参考源平盛衰記で鎌倉本とは一方系の「康豊本」のことであり、この鎌倉本は「一本」として「一本不知所 世之所秘 亦異本也 今以一本称之」と記されている⁽⁵⁾。

寛一本は九種類十一本が現存している。渥美かをる氏はこれらを三種類に分類し、一つ目に「祇王・小宰相」を欠き、巻末に寛一奥書のあるものが、竜谷大学本、高良神社本、寂光院本、陽明文庫本であるとしている。二つ目は、「祇王・小宰相」があり、巻末に寛一奥書のあるもので、これが高野本、竜門文庫本、天理図書館本、また終部が散佚し、他本をもって補われたことで寛一奥書を欠くものに西教寺文庫本があるとしている。最後に寛一奥書を欠くが寛一同類本と認められるものに、熱田真字本、内閣灌頂本、芸術大学本があるとしている。

二節 読み本系諸本

四部合戦状本「平家物語」は慶應義塾大学やその他蔵である。真名

本で表題には単に「平家物語」とある。巻一には「并序 四部合戦状第三番闘諍」と記されている⁽⁶⁾。十二巻であり、巻二、四、八を欠き、別に灌頂巻が存在する。各巻巻頭に序を設けているが、それは巻頭本文の一部を序の体裁に記しただけのものである。

南都本「平家物語」は彰考館蔵の片仮名交じり本である。十二巻で、巻一、三、四、五が欠けており、灌頂巻は立てない。

長門本「平家物語」は二十巻で赤間神社等に収められている。赤間神社蔵本は「群書一覽」に十六巻とあるが、現存する長門本は二十巻である⁽⁷⁾。灌頂巻が特立している。

延慶本「平家物語」は、大東急記念文庫蔵で片仮名交じり本である。六巻で、灌頂巻は特立していない。

源平盛衰記は蓬左文庫等の収められており、平仮名交じり本である。四十八巻で巻四十八巻は灌頂巻に相当する。以上が本論で使用する諸本の概要である。

三章 灌頂巻による諸本成立順の検討

一節 研究目的

「平家物語」の成立については様々な先生方が述べている⁽⁸⁾。しかし、その多くが灌頂巻以外の巻の比較から行われている。灌頂巻の成立については、前述したとおりであるが、現在は後補説が有力だとされる。本論文では、灌頂巻の成立の視点から、灌頂巻、ひいてはそれに該当する部分から諸本の成立を考えようとするものである。ここでは「大原御幸」「六道の沙汰」「女院出家」を用いて比較を行うこととする。

二節 語り本系統について

まずは語り本系統から示していく。尚、一般的に語り本系統の諸本とされる南都本は非常に章の構成が語り本に近い。なので、南都本も語り本系統の諸本の比較に使用した。

「大原御幸」では、法皇が女院の庵室を覗くが、中に女院はおらず、その代わりに一人の老尼が登場する。この老尼に法皇が、女院の所在を尋ねると、老尼は女院は山へ花を摘みに行ったと答える。法皇が、女院自ら花を摘みに行ったことを嘆くと、老尼は、

「^一五戒十善の御果報^二つきさせ給ふ^三によって、今かゝる御目を御覧ずるにこそさぶらへ。捨身の行になじかは御身ををしませ給ふべき。

因果経には「^二欲知過去因、見其現在果、欲知未来果、見其現在果^三」^四とかれたり。過去未来の因果をさとらせ給ひなば、つや／＼御歎あるべからず。悉達太子は十九にて伽耶城をいで、檀特山のふもとにて、木葉を^四つらねてはだえをかくし、嶺にのぼりて薪をとり、谷にくだりて

水をむすび、難行苦行の功によって、遂に成等正覚し給ひき」

と述べるのである。^⑨これは覚一本の一節である。屋代本は、

「^一釈迦如来ハ・中天竺ノ主・浄飯大王ノ太子・サレトモ・伽毘羅城ヲ出テ・檀徳山ニ入・高キ峯ニ上テハ・爪木ヲ取深谷ニ下テハ・水ヲ結ヒ・雪ヲ払イ・氷ヲ砕ク・ノミナラス・難行苦行ノ・功積

テ・遂ニ正覚ト成給フ・前世ノ宿習ヲモ・後世ノ宿業ヲモ・覚ラセ給テ・捨身ノ行ヲ修シ座マサンハ・何ノ御憚カ候ヘキ

と書かれている。^⑩南都本は、

「^一尺迦如来ハ中天竺^{アルシ}ノ主浄飯大王ノ太子ナリケレトモ伽耶城ヲ出テサセ給ヒ檀徳山ヘ入ラセ給ヒテ高キ峯ニハ薪ヲトリ深キ谷ニハ水ヲ結ヒ雪ヲ拂ヒ氷ヲクタクノミナラス難行苦行ノ功積リテ遂ニ正覚ナラセ給キサレハ先ノ世ノ宿善ヲモ後ノ世ノ宿業ヲモ思召サトラセ給テ捨身ノ行ヲ修シ御座ンハ何ノサワリカ候ヘキ

と書かれている。^⑪百二十句本と百二十句斯道本はこの部分の詞章が同じであるので、百二十句本を引用すると、

「ことあたらしき申しごとにてはさぶらへども、^一釈迦如来は、中天竺の主、浄飯大王の太子。されども伽毘羅城を出でて、檀特山に入り、高き峰には爪木を拾ひ、深き谷には水掬ひ、雪をはらひ、^六水を砕くのみならず、難行、苦行の功を積み、つひに正覚なし給ふ。前世の宿執をも、後世の宿業をも、さとらせ給ひて、捨身の行、修しましさんには、なにの御はばかりかさぶらふべき。」

となる。^⑫さらに、竹柏園本は、

梟ハ五戒十善ノ御果報尽サセ給フニ依今係ル御目合せ給候ヒヌ捨身ノ行ヲ修シ玉クンニ御身ヲ惜サセ可給様ヤ侍フ過去因果経ニハ欲知過去因見其現在果欲知未来果見其現在因ト説レタリ過去未来ノ因果ヲツマ／＼悟ラセ玉イナハ不レ可有御歎昔年釈迦如来中天竺ノ主浄飯大王ノ太子タリシカ共浮世ヲ厭出ニ伽毘羅城ヲ檀特山ノ岾ニテ木葉ヲ連テ腐シ蔵シ峯ニ上テ薪ヲ拾合ニ下テ水ヲ汲依ニ難行苦行功ニ成等正覚シ玉ヒキ三世ノ夙習シ悟セ給テ修シ捨身ノ行ニシ給フンニ何ノ惶力候ヘキ

となつてゐる。鎌倉本は、

五階十善ノ御果報ツキサセ給ニヨテ今カ、ル御目ヲ御覽セラル、ニ社侍ヘ捨身ノ行ニナシカハ御身ヲ惜セ給ヘキ因果経ニハ欲知過去因見其現在果欲知未来果見其現在因ト説レタリ過去未来ノ因果ヲ悟セ給ヒナハツヤ／＼不可有御欲悉達太子十九ニテ伽耶城ヲ出檀特山ノ麓ニテ木葉ヲ連テ膚ヲ蔵シ峯ニ上テ薪ヲ採溪ニ下テ水ヲ結ヒ難行苦行ノ功ニヨテ成等正覚シ給キ前世ノ宿業ヲモ後世ノ宿業ヲモ覚セ給テ捨身ノ行ヲ修シ座サンハ何ノ憚力可候

となる。

ここで、これらの一節の六つの箇所について着目する。傍線と一から六の漢数字は便宜的に付したものである。問題にするのは、老尼の話の始まりの部分。因果経に関する部分の有無。「悉達太子は十九に

て…」の箇所。「木の葉につらねて…」の箇所。「薪をとり…」の部分の有無。「氷を砕くのみならず…」の部分の有無。これらの六つを順に見ていくこととする。

一は屋代本、南都本、百二十句本は「釈迦如来は…」から始まるのだが、他の諸本は「五戒の十善の御果報…」から始まっている。二は覚一本、竹柏園本、鎌倉本にはあり、他の諸本にはない。三は覚一本、鎌倉本にはあり、他の諸本ではない。四は覚一本、竹柏園本、鎌倉本にはあり、他の諸本にはない。五は覚一本、南都本、竹柏園本、鎌倉本には存在するが、他の諸本にはない。六は屋代本、南都本、百二十句本、百二十句本斯道本には存在するが、他の諸本にはない。以下を表にまとめると次のようになる。

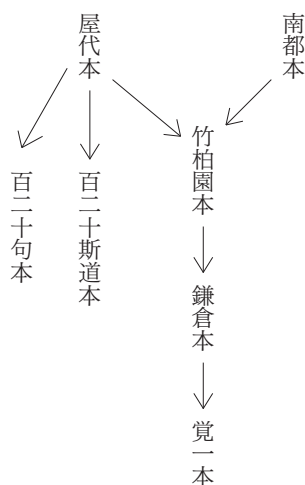
表一

	鎌	竹	百	百斯	南	屋	覚
一	○	○	×	×	×	×	○
二	○	○	×	×	×	×	○
三	○	×	×	×	×	×	○
四	○	○	×	×	×	×	○
五	○	○	×	×	○	×	○
六	×	×	○	○	○	○	×

ここから得られる結論は、屋代本、南都本、百二十句斯道本、百二十句本は非常に似た諸本であることがわかる。さらに覚一本、鎌倉本

も似ていることがわかる。南都本は全体的には、屋代本、百二十句斯道本、百二十句本と同じであるが、五の部分だけが違う。竹柏園本は全体的には覚一本、鎌倉本系統に近いが、三の部分ではかの諸本と似ていることがわかる。表一からは以下の結論になる。

表二



次に、老尼の話から後の七つの点にも着目する。老尼が自分の正体を明かした後の、

供奉の公卿殿上人も、「ふしぎの尼かなと思ひたれば、理にてありけり」とぞ、をのく申しあはれける。

の部分¹⁵が、百二十句本、百二十句斯道本にはないが、他の諸本には存在する。

その後の、

あなたかなたを観覧あれば、庭の千種露おもく、籬にたおれかゝりつゝ、そとものを小田も水こえて、鳴たつひまも見えわかず。

という一文¹⁶が、百二十句本、百二十句斯道本にはないが、他の諸本にはある⁽²⁾。

御庵室の中の描写では、屋代本と百二十句斯道本は

彼浄名居士方丈室中ニ・三万六千ノ・床ヲ並ヘ十方ノ諸仏ヲ奉請リケンモ角ヤトソ・覚ヘタル・一間障子ヲ開テ御賢スレハ・竹ノ御竿ニ披懸タル・麻ノ御衣紙ノ衾昔ノ蘭麝ノ匂ニ引替タル

となつてゐる。¹⁷ 南都本では、

障子ヲ引アケ給タレハ御寝所ト覚シクテ竹ノ御掉ニ懸ラレタル物ハ麻ノ御衣ニ紙ノ衾昔ノ蘭麝ノ匂ヲ引替テソラタキ物ニカホルハ不断ノ香ノ煙也彼浄名居士ノ方丈ノ室ニ三万二千ノ床ヲ並ヘ諸佛ヲ請シ奉ラレケンモ是ニワ過シトソ見ヘシ

となる。¹⁸ 他の諸本では

左には普賢の畫像、右には善導和尚并に先帝の御影をかけ、八軸の妙文・九帖の御書もをかれたり。蘭麝の匂に引きかへて、香の

煙ぞ立のぼる。

となる。⁽¹⁹⁾さらに、

彼浄名居士の方丈の室内に三万二千^ニの床をならべ、十方の諸佛を請ひ奉り給ひけむも、かくやとぞおぼえける。

の部分は、覚一本、屋代本、鎌倉本は「二千」になっているのに対し、竹柏園本、百二十句本、百二十句斯道本は「六千」になっている。

「思^ホいきや深山の奥にすまひして 雲井の月をよそに見んとは」という歌は屋代本、南都本、百二十句斯道本にはなく、他の諸本にはある。⁽²¹⁾

法皇仰せなりけるは、「異国^ヘの玄奘三蔵は、悟の前に六道を見、吾朝の日藏上人は、蔵王権現の御力にて六道を見たりとこそうけ給はれ。是程まのあたりに御覧ぜられける御事、誠にありがたうこそ候へ」とて、御涙にむせばせ給へば、供奉の公卿殿上人もみな袖をぞししぼられける。

という文の位置が覚一本だけは、女院の六道語りの後に書かれている。他の諸本では女院の六道語りの前に書かれている。

「女院死去」にある二つの歌、「いにしへは月にたとへし君なれどそ^ト

のひかりなきみ山邊のさと」、「いざさらばなみだくらべむ郭公われもうき世にねをのみぞなく」に注目する。⁽²³⁾ 覚一本、南都本、竹柏園本、鎌倉本は前述の通りの順序で収められているのに対し、百二十句本は順序が逆である。屋代本と百二十句斯道本は「いざさらば…」の歌しか書かれていない。以下をまとめると次のとおりである。

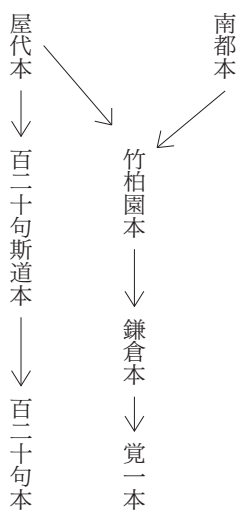
表三

	鎌	竹	百	百斯	南	屋	覚
イ	○	○	×	×	×	×	○
ロ	○	○	×	×	×	×	○
ハ	○	○	○	△	□	△	○
ニ	二千	六千	六千	六千	二千	六千	二千
ホ	○	○	○	×	×	×	○
ヘ	△	△	△	△	△	△	○
ト	○	○	△	×	○	×	○

これを見ると、覚一本、竹柏園本、鎌倉本は非常に似ていることがわかる。しかし、⑥だけが覚一本独自であるし、「六道」の部分の長さからも、覚一本は一番後出であることが想像に難くない。屋代本と百二十句斯道本は表が同じである。屋代本は詞章の素朴さから見て、語り本の最古の写本と言えるのではないか。南都本は③などに独自のものが見える。語り本に非常に似たものとなっているが、ここは読み本系統の影響がうかがえる。④を見ると、南都本は「二千」になっており、覚一本、鎌倉本と同じである。しかし、竹柏園本は「六千」に

なっており、屋代本の影響が見える。これより、竹柏園本は、屋代本と南都本の双方の影響が見える諸本であることがわかるのである。表一、二の結果をまとめると以下のような成立過程が想定できる。

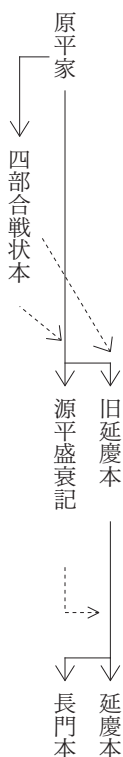
表四



二節 読み本系諸本について

山下宏明氏は、「平家物語研究序説」のなかで、次のように読み本系統の諸本の関係を示している。^② 尚、点線は直接ないし間接的な影響のあることを示している。

表五



では実際に灌頂巻の比較を通して行うとどのような結果になるのか示してみる。ここでは、四部合戦状本、源平盛衰記、長門本、延慶本を用いて比較を行う。まずは灌頂巻やそれに該当する部分の各諸本の章の展開を見てみる。

四部合戦状本は、法皇が御幸に連れて行った面々、全ての人物の名称が詳細に記されている。それが記されたのち、山の自然描写が入る。その後、寂光院に入り、女院の庵室の外観を眺め、少し中を覗くが女院はおらず、人を呼ぶと老尼が登場する。そして、老尼が女院について話をするという展開となっているのである。

次に源平盛衰記では、これも四部合戦状本同様、お供の面々の名前が詳細に記されている。その後は山の風景描写が入り、寂光院の景観の描写、法皇の歌が入り、女院の庵室を見て、老尼が登場するという場面に続く。法皇の歌と老尼の話に少し相違はあるものの、四部合戦状本と展開はほぼ同じである。

それに対し、長門本はお供の面々の殿上人、北面の名前は詳細には書いていない。山の描写の後に、法皇の歌、寂光院に入り、女院の庵室を見つける。その後、四部合戦状本、源平盛衰記は老尼が登場するのに対し、長門本では庵室の中に入り、庵室の中の描写となり、老尼が登場するという展開をとっているのである。

同様に延慶本では、お供の面々の全ての名前が詳細に記され、寺の描写が入り、女院の庵室の外観、庵室の中の描写と続き、老尼が登場するという流れとなっている。このようにみると、読み本系統では、展開に大きく二つのパターンが存在するのである。しかし、長門本と延慶本は展開が一緒であるのだが、内容に違いが見られる。長門本には、お供の面々の名前の省略が見られるが、延慶本は詳細に書かれている。庵室の中の描写も各々違っているのである。『往生要集』『古今』『万葉』などの書物が女院の庵室で見られることも、長門本とは

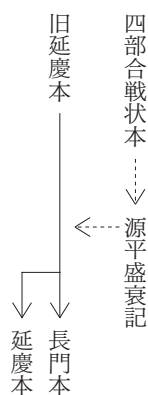
違う。長門本では「かはくまでなき墨染の袂かなこはたらちめの袖のしづくか」という歌が見られるなどの延慶本とは違う面も見受けられる。⁽²⁵⁾

ここから考えると、長門本と延慶本は参考にした諸本は同じではあるが、縦で繋がる関係ではなく、兄弟のような対になる関係の諸本ではないかといえるのである。

四部合戦状本と源平盛衰記との関係は、文体の素朴さや、庵室の描写の増補の量から見ても、源平盛衰記が後出となるのではないか。六道に関しての記述も、源平盛衰記は様々な過去の人物の記述を行うなど、説話的な増補が行われている。

源平盛衰記は延慶本、長門本両者に影響を与えている可能性が高い。「かはくまでなき墨染の袂かなこはたらちめの袖のしづくか」は長門本には書かれていると前述したが、これは源平盛衰記にも見えるのである。さらに、源平盛衰記、延慶本には庵室の中で、「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」の四句が見えることや、源平盛衰記に「古今」「万葉」の言葉が見られることから、関係があると思われるのである。しかし、六道の記述に関しては、各々の諸本が違っており、源平盛衰記は直接的ではなく、間接的な影響を長門本、延慶本に与えていると思われる。この結果から以下のような関係が成り立つ。

表六



終わりに

今回は、語り本と読み本の成立について、灌頂巻の視点から考察した。今回から諸本に関して、二つの問題点が見つかる。まず、一つとして、南都本の位置についての問題である。灌頂巻に関して、南都本はかなり語り本に近い性質を持っているが、語り本にはない文などが見えることから、読み本との関係がうかがえる。これについては、さらに読み本との比較検討が必要であり、読み本のどの諸本に影響を与え、どの諸本の影響を受けているのか、今後の研究から明らかにする必要がある。

さらに、長門本も問題で、延慶本と兄弟関係にあるようであるが、文体が語り本の接近している。六道の記述も延慶本に比べ、短く、これも語り本に近い性質を示している。今後、長門本と語り本の関係について考える必要があるであろう。

最後に、ご指導いただいた黒田彰先生に、感謝の意を示すとともに、厚くお礼申し上げる次第である。

〔注〕

- (1) 後藤丹治『戦記物語の研究』（思文閣出版 昭和五十三年九月初版 一五三頁）
- (2) 山田孝雄『平家物語考』（勉誠社 昭和十三年六月初版 三八〇頁）
- (3) 渥美かをる『平家物語の基礎的研究』（笠間書院 昭和五十三年一月）
- (4) 『斯道文庫古典叢刊之二 百二十句本平家物語 別冊』（汲古書院 昭和四十五年一月発行）

- (5) 『参考源平盛衰記』(近藤活版所 明治十五年八月出版 明治三十四年六月再版 五頁)
- (6) 慶應義塾大学付属研究所 斯道文庫『四部合戦状本 平家物語』(大安 昭和十二年三月 一頁)
- (7) 『定本 群書一覽 巻一 書誌目録シリーズ14』(ゆまに書房 昭和五十九年六月発行)
- 二二七頁には「平家物語長門本 写本 十六巻 或ハ十二巻」とある。
- (8) 注(3) 前掲書
渥美かをる氏は語り本の成立順序について、竹柏園本、鎌倉本、百二十句本、覚一本の順で成立したと述べている。
- (9) 高木市之助他『平家物語下』(岩波書店 昭和三十五年初版 四三一頁)
- (10) 『屋代本平家物語 下巻』(桜楓社 昭和十八年五月 五二二頁以下)
- (11) 高橋伸幸「南都本平家物語 巻十二(翻刻)」(『札幌大学教養部紀要』巻十七号 昭和五年九月発行 一七四頁)
- (12) 水原一『平家物語下』(朝日出版社 昭和二十三年 三七一頁)
- (13) 山下宏明『平家物語 竹柏園本下』(八木書店 昭和五十三年十一月四六〇頁以下)
- (14) 山岸徳平『鎌倉本平家物語』(汲古書院 昭和四十七年初版 二九六頁以下)
- (15) 注(9) 前掲書(四三二頁)
- (16) 注(9) 前掲書(四三二頁)
- (17) 注(10) 前掲書(五二四頁)
- (18) 注(11) 前掲論文(一七五頁)
- (19) 注(9) 前掲書(四三二頁)
- (20) 注(9) 前掲書(四三二頁)
- (21) 注(9) 前掲書(四三三頁)
- (22) 注(9) 前掲書(四三九頁以下)
- (23) 注(9) 前掲書(四四一頁)
- (24) 山下宏明『平家物語研究序説』(明治書院 昭和四十七年三月)
- (25) 『平家物語 延慶本 長門本 対照本文』(勉誠社 平成二十三年三月一五一七頁)

(さかぐち たくや 文学研究科文学専攻修士課程)

(指導教員・黒田 彰 教授)

二〇一五年九月三十日受理